

小川 覚之（おがわ ただゆき）（第3期生）

略歴

- 2001年 東京大学大学院医科学専攻修士課程入学
（第3期生）
- 2003年 東京大学大学院医学系研究科
博士課程（分子細胞生物学専攻）入学
- 2005年 日本学術振興会特別研究員 DC（2006年中途辞退）
- 2006年 東京大学大学院医学系研究科
博士課程中途退学、助手採用
- 2007年 東京大学大学院医学系研究科
解剖学・細胞生物学大講座 助教



基礎医学研究者としての基礎を作った医科学専攻

研究者として重要な資質は何かという問いに対し、様々な答えがあるとは思いますが。私が思う研究者に重要な資質として、コミュニケーション能力・勤勉さ・好奇心・情熱・自由な発想を挙げたいと思います。そして私にとって医科学専攻課程はこれらの研究者の基礎を形成する機会を存分に与えてくれるものでした。

大学院に入り高い志を持つ仲間と出会いました。そして様々な医学研究分野において世界をリードする多くの先生のお話を沢山聞き、広い視野に立って自分の研究人生のスタートを切る機会に恵まれました。講義は教科書に載っている基礎的な事から始まり、研究中の最先端の知見、さらには第一線にいらっしゃる先生が自分達と同じ頃にどのような学生時代を過ごし、何を考え、その後どのような経験を積んで現在の研究へたどり着いたのか、といった通常の講演では聞くことのできないお話まで、たくさん聞かせて頂きました。どの先生も皆大変お忙しいにも関わらず、当時医学図書館地下にあった小部屋にいらして僅か20名程の我々相手に何時間も情熱的な授業・ディスカッションをしてくださいました。日本を代表する医学研究者それぞれの持つエスプリ・情熱・価値観・生き様に間近で触れたことは、研究人生をスタートさせたばかりの私たちにとって非常に刺激的なものとなりました。また当時、脳全体から分子まで広い分野に関心があったため進路を決めかねていた私にとって、野本明男先生（微生物学）や清水孝雄先生（生化学）、谷口維紹先生（免疫学）、廣川信隆先生（細胞生物学）、宮園浩平先生（分子病理学）、金澤一郎先生（神経内科学）から沢山の先生のお話やアドバイスを頂き、どの分野に進んでも基礎医学研究者として邁進して行こうと覚悟を決めるきっかけとなりました。

同期の仲間とは毎日のように互いに刺激しあい、しょっちゅう医学部本館地下に集まってディスカッション（宴会？）し、時にはクラス担任の野本先生や専攻長の清水先生にも御参加頂き、深夜までコミュニケーションしました。本格的な研究人生を開始する時期に、お互いの研究への情熱・自由な発想をぶつけ合い認め合ったこの時間はとても貴重なものだったと思います。配属研究室が決まった後も、卒業後も、同期の仲間との交流は現在まで続いています。

私は廣川信隆研究室へ配属となり博士課程へ進み、課程途中で教員となり現在に至りますが、医学専攻課程で優れた指導者に恵まれ仲間と共にコミュニケーション能力・勤勉さ・好奇心・情熱・自由な発想を認め合う力を培ったことは、私にとって基礎医学研究者としての重要な基盤を形成し、その後の私の研究人生を支えていると思います。

これからも様々なバックグラウンドと高い志を持った学生の皆さんが本学の医学専攻課程の門を叩き、医学研究の世界に飛び込んで来ることを期待しています。